

廣石 望 ほか 著

『ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編』

(日本キリスト教出版局、2021年)

稲 船 睦

INAFUNE Mutsumi

2018年12月に刊行された「聖書協会共同訳」は、新共同訳や新改訳2017などの訳とどのように違うのか。また、どのような特徴を持つのか。

本書では、このような疑問に対して、「NTJ新約聖書注解」の監修者会のメンバーである6名の著者たちが答えている。また、著者の中には、聖書協会共同訳の翻訳作業に携わった者もいるが、できる限り中立に立ち、聖書協会共同訳を評価しようとする努力が見られる。

本書の構成は、①～⑳の番号がトピックごとに振られている。①～⑭では、例外があるものの、マタイによる福音書やマルコによる福音書といった「福音書」における聖書協会共同訳で変更した点や説明が必要な点などを取り扱い、⑮と⑯では、聖書協会共同訳の「使徒言行録」について取り扱う。また、⑰～㉑は聖書協会共同訳の「手紙」を取り扱い、最後の㉒では、異読の記号である「異」について扱う。

このような本書の構成は、『聖書 聖書協会共同訳』の順番に則しており、聖書を傍らに置いて読みながら、聖書協会共同訳がどのような点で他の訳と違うのか、また、その違いにはどのような意味があるのかについて考え、聖書をさらに深く読み込むことに役立つと思われる。

また、本書は聖書協会共同訳と他の訳の違いのみに言及するのではなく、なぜこれまでの訳から変更されたのか、新約聖書の時代背景、ギリシア語の原文などについても説明されている。そのため、本書を読むことによって新約聖書についてさらに理解し、より深く聖書の世界を味わうことができると

思われる。

本書の内容だが、①～③のトピック全てをここで紹介することは難しいため、トピックの中からいくつか注意を引いたものを選び、紹介する。

①『『イエス・キリストの系図』』では、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図（マタ 1:1）」の「系図」に「創世の書」という別訳がつけられている理由を説明する。原文では「ゲネシスの書」とされている。「ゲネシス」という言葉は、起源や誕生などの意味の広い語である。この「ゲネシスの書」という言葉はかつて系図を指すと考えられていたが、現在の専門家たちの間では支持されていない。しかし、慣れ親しんだ「系図」という語を大きく変更することは難しかったのか、別訳として「創世の書」が付けられた。また、「系図」と読むよりも、「創世の書」と読む方がマタイの意図をくみ取れるのではないかと辻学は考えている（11 頁）。

⑤『『規定の病』？』では、聖書協会共同訳がマルコによる福音書 1 章 40 節に登場する「レプラ」をなぜ「規定の病」と訳したのかについて述べている。この箇所は、口語訳では「らい病」、新共同訳では「重い皮膚病」、新改訳 2017 ではヘブライ語をそのままカタカナにした語「ツアラト」と訳されてきた。聖書に登場する「レプラ」という病がどのような病気なのかについてはいまだにわかっていない。しかし、「らい病」や「重い皮膚病」と指定することによって差別を引き起こす恐れがあるという批判があったのは事実である。そのため、新改訳 2017 では、「ツアラト」に変更されたものの、須藤伊知朗はこれを翻訳ではなく、音写しただけだと批判している（25 頁）。聖書協会共同訳では、ヘブライ語聖書（旧約聖書）に規定されている病という意味を込めて、「規定の病」とした。しかし、須藤は、「規定の病」では何を指しているかわからないことや、聖書の世界にも差別があったこと、さらに、イエスの大胆な行動を記憶にとどめるためにも、「汚れ病」というような造語を作り、訳した方がいいのではないかと述べている（26 頁）。

⑦『『麦の酒』』では、聖書協会共同訳の新しい試みである訳「麦の酒」について述べている。ルカによる福音書 1 章 15 節に登場するこの言葉は、新

共同訳や新改訳 2017 において「強い酒」と訳されている。しかし、聖書協会共同訳のルカによる福音書 1 章 15 節では、「麦の酒」となっている。麦の酒の原文は、「シケラ」となっているが、これはヘブライ語の「シェハル」をギリシア語に音写したものである。この「シェハル」というヘブライ語は最新の研究によって、ビールのような麦の酒を指すのではないかと考えられている。そのことを反映して、聖書協会共同訳では「シケラ」を「麦の酒」と訳したのである。

⑩「注意を促す『アーメン』」では、聖書協会共同訳において、ヨハネによる福音書 1 章 51 節の「アーメン」を「よくよく（言っておく）」と訳すことの是非について考察している。この個所は、新共同訳では「はっきり言っておく。」、新改訳 2017 では、「まことに、まことに、あなたがたに言います。」と訳されている。「よくよく」、「はっきり」、「まことに、まことに」と訳されるギリシア語は、「アーメン」である。「アーメン」は、「その通り」という意味を持つ言葉である。ヨハネによる福音書では、「アーメン」が一つの文の中で 2 回繰り返され、強調されている。聖書協会共同訳はこの「アーメン」の回数を訳し分けるために、「よくよく」と訳している。しかし、「アーメン」という言葉は、一般の人々にも知られているため、「アーメン」とそのままにしたほうがインパクトもあって良かったのではないかと伊東寿泰は考えている（41 頁）。

⑪「信心深い『ユダヤ人』か、信心深い『人々』か」は、使徒言行録 2 章 5 節において、新共同訳では「信心深いユダヤ人」とされていた箇所が、聖書協会共同訳では、「信仰のあつい人々」となっていることに対する説明である。聖書協会共同訳は、本文批評によって他の訳とは違い「人々」という読みを採用した。中野実は、本来の読みが「ユダヤ人」ではなく、「人々」だとした場合、福音宣教によって、救いが全世界に及ぶことの暗示になるのかもしれないと考えている（63 頁）。

⑫『『使徒たちの中で目立って』いる『ユニア』(女性)』では、ローマの信徒への手紙 16 章 7 節において、新共同訳が「ユニアス」と訳していたところを聖書協会共同訳が「ユニア」と訳し、別訳として「ユニアス」を付け

加えた点について述べている。原文では、大文字でアクセントの記号が無い IOUNIAN（ユーニアン）と書かれている。古代教父たちはこの「ユーニアン」の「ニ」にアクセントを付け、女性の名前である「ユニア」の対格だとしてきた。しかし、後世の研究によって、「ユーニアン」の「アー」にアクセント記号を付け、男性の名前である「ユニアス」の対格であるという誤った理解が広まってしまった。実は、「ユニア」という名前は1世紀のローマの墓碑銘などに見られるありふれた名前であるが、「ユニアス」という名前は古代文献に証言が無い名前である。このことや古代教父たちの証言などを踏まえて、最近では、「ユーニアン」は、「ユニア」という女性の名前であると考えられるようになった。そのため、聖書協会共同訳は本文に「ユニア」を採用したのである。しかし、須藤は、新共同訳が「使徒たちの間で目立っており」と訳したのを、聖書協会共同訳が「使徒たちの間で評判がよく」としてしまったのは、残念なことであり、使徒に女性がいないという偏見がまだ残っていると評価している（83頁）。

②③「試練は『世の常』か」では、聖書協会共同訳のコリントの信徒への手紙一10章13節「あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありません」と「世の常」に付く別訳「人間的でない」について述べられている。コリントの信徒への手紙一10章13節は、人生には試練がつきものであるという理解が浸透している。しかし、原文に登場する「人間的なもの」という意味のギリシア語「アントローピノス」をどう訳すかという問題があるため、訳がばらばらになっている。廣石望は「人間的な」試練を人が引き起こすものであると考えている（93頁）。

③④「『異』とは何か」では、聖書協会共同訳に出てくる「異」という記号について紹介されている。この「異」という記号は、異読を表すものである。聖書協会共同訳を例にとると、異読とは聖書協会共同訳が採用しなかった異なる読みを指す。新約聖書の本文はオリジナルの文章である原本が無いため、異読を示すことが重要である。そのため、聖書協会共同訳が注なしの日本語聖書の伝統を超え、注を付けたことは非常に大きな意義がある。なぜならば、異読間の比較によって、聖書伝承の多様性やその意義を理解するこ

とができるからである。

『ここが変わった！「聖書協会共同訳」新約編』は、聖書協会共同訳がこれまでの他の訳とはどのように違うのか、どのような特徴を持っているのかを研究者たちの目線から解き明かしていく本である。本書を読むと、信仰と学問の狭間で揺れ動きながら、訳を決めていくことの難しさを痛感する。

(本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程前期課程)